

# アメリカにおける「ニュー・エコノ ミック・ヒストリー」の生成と発展

田 口 芳 弘

## はじめに

「ニュー・エコノミック・ヒストリー」(New Economic History) という言葉は、アメリカの経済学会、経済史学会において、この十数年間にほとんど完全に定着したということができよう。しかし、わが国においては、この新語の造語者の意識の底にあったであろうアナロジーの対象、「ニュー・エコノミックス」という言葉ほどの流通性をいまだに獲得してはいないようである。より早い段階で多少の銜気をもって使われた新造語「クリオメトリックス」(Cliometrics) という言葉にいたっては、一部のひとびとを除いては、よりなじみの薄いものであろう。ところで、「エコノメトリック・ヒストリー」(Econometric History) あるいは「計量経済史」といえば、わが国では経済学にも多少とも関心のあるひとびとにとって、計量経済学の近年のめざましい発展と普及から、なんとなくその内容を類推することができるであろう。現に、わが国では(経済史学会ではなく)理論・計量経済学会において、1973年の年次大会から、「数量経済史」という表現で、学会の主要な分科会の一つに加えられるようになった。最近、日本経済史についてのすぐれた数量的研究がつきがづきに公にされるようになったので、この分野に対する関心が、単に経済学に関係のあるひとびとだけでなく、歴史に関係するひとびとの間にも急速に高まりつつあるように見受けられる<sup>1)</sup>。

ところで、アメリカにおいて「ニュー・エコノミック・ヒストリー」という表現が一般的流通性をえたとのべたが、いまなおひとにより時に応じて種々の

表現が混用されており、かならずしもその間の明確な区別と定義づけは行なわれていない。ここでは、われわれは一応統一的にニュー・エコノミック・ヒストリーという呼び方をとることにする。しかし、問題なのは、新しいラベルではなく、ラベルによって表わされる新しい研究方法の性質とその内容であろう。

ニュー・エコノミック・ヒストリーは、わずか十数年の間に、アメリカ経済史学界に最初は革命的衝撃を与え、やがて流行となり、もはや学界を圧倒して定着し、ほとんどの代表的大学で教えられるようになった。新しい世代の経済史家は、それを当然のこととして受け入れ、ニュー・エコノミック・ヒストリーは、もはや新しくはなくなりつつある。しかし、その生成と発展のあとには、わが国での周知の度合を考えると、いまなお学史的興味の対象とはなりうるであろう。ニュー・エコノミック・ヒストリーの起源、特色、批判については、すでにこの分野でのわが国の先駆者安場保吉氏の綜括的で要領をえたすぐれた紹介が存在する<sup>2)</sup>。すべてはこの論文につぎるが、屋上屋を架するの愚をあえてするのは、反復にもまた多少のペダゴジカルな意味はあろうかと思われるからである。

## I ニュー・エコノミック・ヒストリーの誕生

ニュー・エコノミック・ヒストリーは、相尅の中から生まれたといわれる。しかし、このアメリカ「経済史の再生」の起源を決定する特定の年月と場所を指摘することは困難である。相尅の場合は、主としてアメリカ経済史学会の年次大会の会場であった。そこでの分科会における報告とそれに対する討論において、

- 
- 1) わが国における「ニュー・エコノミック・ヒストリー」のパイオニアの研究（それは同時にアメリカにおけるこの分野の先駆的研究でもあるが）は、いうまでもなく安場保吉氏の著明な論文、「The Profitability and Viability of Plantation Slavery in the United States.」『季刊理論経済学』第12巻 1961年9月 60-67ページである。論文のタイトルに計量経済史とうたわれたのは、建元正弘「日本経済成長と外国貿易—計量経済史学への招待—（上、下）」『経済月報』（静岡経済研究所）第40-41号、1966年6-7月が最初のものの一つではないかと思われる。
- 2) 安場保吉「『新しい経済史』について」『アメリカ研究』（アメリカ学会）第4号、1970年、134-145ページ；改稿「『新しい経済史』：革新と偏向」梅村又次他編『数量経済史論集 1 日本経済の発展 近世から近代へ』日本経済新聞社、1976年、所収、355-370ページ。

また会場のフロアからの一般の質疑応答とコメントにおいて、伝統的なタイプの歴史家である経済史家と、歴史家であると同時に経済学者でもある新しいタイプの経済史家との間で、何年にもわたる争いが続けられた。その相剋の中で、ニュー・エコノミック・ヒストリーは認知されていったのである。

経済史復活の最初の日を確定することはできないが、最初の顕在的表出は、1957年9月6-7日ウィリアムズ・カレッジで開かれたアメリカ経済史学会の第17回年次大会における、W. W. ロストウ (Wait Whitman Rostow)の報告とジョン・マイヤーとアルフレッド・コンラッド (John R. Meyer and Alfred H. Conrad)の報告の二つであったとされている。この二つの報告は、ともに経済史における経済理論の役割を強調した点で、ニュー・エコノミック・ヒストリーの源流といってよいであろう<sup>3)</sup>。とくに、マイヤー=コンラッドの報告は、歴史的推論における理論の機能を取りあげるだけでなく、歴史における数量化と歴史的仮説の検証の問題を論じた。彼らは、歴史家とは過去の経験の一部についての事実ないし真の叙述の単なる蒐集に甘んずるものではなく、起ったことについての原因を見出し、それを説明しようとするものであるという前提に立って、歴史的因果関係の概念の分析から出発し、ストカスティックな世界での説明に関連する問題を取りあげ、科学的推計の分析道具が経済史学にいかに応用するかを示唆したのである。この報告それ自体はきわめて抽象的議論であるが、それが学説史的重要性をもつにいたったのは、単なる方法論論議にとどまらず、彼らの主張が南部奴隷制経済を素材にしてなされた実際例によって裏づけられていたからである。

コンラッド=マイヤーは歴史研究における理論の梃す役割、数量化、仮説の検証を例証するために、南部奴隷制についての実証的研究を行ない、同じ時期、1957年9月にマサチューセッツ州ウィリアムズタウンで開催されたナショナル

3) W. W. Rostow, "The Interrelation of Theory and Economic History," *Journal of Economic History*, Vol. XVII(December, 1957), pp. 509-523; John R. Meyer and Alfred H. Conrad, "Economic Theory, Statistical Inference and Economic History," *Journal of Economic History*, Vol. XVII(December, 1957), pp. 524-544.

・ビューロー・オブ・エコノミック・リサーチ主催の「所得と富に関する会議」(NBER Conference on Income and Wealth)で、「南北戦争前の南部における奴隷制の経済学」という報告を発表した<sup>4)</sup>。彼らのこの二つの報告は盾の両面のようなものであるが、この研究こそニュー・エコノミック・ヒストリーの新しい接近方法を実践した最初の標石といえよう。伝統的なこれまでの経済史が、たとえば奴隷制の収益性の問題を、産出綿花価格と投入奴隷価格との単純な関係でとらえようとしたのに対して、彼らは奴隷購入を他の資本資産の購入と同じ標準的な投資の問題として取り扱うことにした。彼らは問題の概念化からさらに進んで、奴隷に対する投資の収益率を計測するための一般的な資本モデルを考え、それに男女の奴隷の収益率の差を表わしうるような奴隷の民勢統計学的行為の考察を加えて、二次的資料から妥当な奴隷の収益率を実際に推計してみせた点で、画期的な新機軸であった。彼らの結論を認めるひと、認めないひと、この二つの報告が経済史の実質的にも、方法論的にも新しい出発であったことについては、今日広く承認するところである。彼らは論争久しかった問題の論争に終止符を打ったというより、むしろ論争をより興味深いものにし、争点をより明確にした点で、後にニュー・エコノミック・ヒストリーの備える特徴を十分にあらわしている。このコンラッド=マイヤーの研究に刺戟され、数多くの研究があらわれることになったが、奴隷制の領域でのもっとも重要な研究に数えられる、奴隷制の存続可能性を検証する基準に、奴隷の養育費と販売価格の差、「資本還元準地代」を用いた安場保吉氏の研究もその一つである<sup>5)</sup>。

4) Alfred H. Conrad and John R. Meyer, "The Economics of Slavery in the Antebellum South," *Journal of Political Economy*, Vol. LXVI (April, 1958), pp. 95-130; reprinted in Alfred H. Conrad and John R. Meyer, *The Economics of Slavery and Other Studies in Econometric History*, Chicago, Aldine, 1964, chap. 3; and also in Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, eds., *The Reinterpretation of American Economic History*, New York, Haper & Row, 1971, pp. 342-361.

5) Yasukichi Yasuba, "The Profitability and Viability of Plantation Slavery in the United States," *Economic Studies Quarterly*, Vol. XII (September, 1961), pp. 60-67; reprinted in Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, eds., *The Reinterpretation of American Economic History*, New York, Haper & Row, 1971, pp. 362-368.

経済史への理論の適用という新しい方法は、初期には主として新しい統計シリーズの拡張のために用いられた。1957年以來、パーデュー大学のランス・デイヴィス(Lance E. Davis)、ジョナサン・ヒューズ(Jonathan R. T. Hughes)、スタンリー・ライター(Stanley Reiter)など一団の若い野心的な計量づいた経済学者たちによって、経済史の数量的分析、とくに経済史における大がかりなデータ処理の研究が進められていた。19世紀アメリカ繊維産業における企業金融の源泉、19世紀前半ニューイングランド繊維産業における株式所有、19世紀ニューイングランド繊維業と資本市場、19世紀のドル・ポンド為替、1860年までのイギリス商船隊などについての新しい統計シリーズを作成し、他の研究者に利用可能なビルディング・ブロックとして提供した。統計学とデータ処理法からのアイデアを歴史研究に導入することにより、歴史家の特殊な知識と見解と相まって、過去に手をつけられなかった歴史的素材の脈を集中的に開発することが可能だと彼らは信じていた。こうした大規模なデータ処理を可能にしたのは、ちょうど第2世代の電子計算機の発達と機を一にし、大量処理の計算設備と処理技術が利用可能になったことによるものである。

1960年ごろになると、新しい傾向は急激に強まっていった。個別的に、異なった研究機関で、孤立して数量的分析に従事していた経済史家の関心と研究方向を、組織的なものにしたのは、1960年の晩秋にパーデュー大学で開かれた第1回の「経済史における数量的方法に関するセミナー」(Seminar on Quantitative Methods in Economic History)であった。経済史に数量的方法を適用することが、に興味をいだいている経済史家全員を集めようという意図で会議が組織された企画・運営にあたったひとりの悩みは、この会議に出席しようというものがアメリカ中をさがして、わずか12-13人しか見つけなかったことだと伝えられている。その後のパーデュー・セミナーやウイスコンシン大学の計量経済史セミナーでの企画・運営の当事者の悩みが、数百人の出席希望者をいかに30-40人にしぼるかに変わってきたことは、わずか十数年の間における隔世の変化である。

歴史家は過去の出来事の再構成の上になつて、過去の基本的性質とわれわれ

にとっての意味を理解しようとする。この過去を再構成する素材には、各社会が造り出したその時代時代の出来事の説明と解釈、歴史的文献と銘うたれるもの他に、各社会がその特徴的過程の中で造り出し、時間の中に忘れさられていく人工の産物の破片、大量の領収書、帳簿、公文書等々といったものがある。これらからの過去の再生は、考古学者が発掘された古代都市の破片からその都市を建設し、そこに生活した文明を理解しようとするプロセスに似ている。これらの素材は、個々の項目の寄せあつめであつて情報としての重要性をもたないが、それを分析のための有用な情報にするためには、なんらかの原理にもとづいて組織し、過去についての推計の基礎にしなければならない。それは統計的推計の問題である。データ処理問題に取り組んだパーデュー・グループは、このように「過去の経済生活の残存する破片から歴史を再構成するのに必要な論理的構造は、本質的に歴史、経済学、統計学のアイディアを含むものである。そうした学際的異種混交の行動の結果は、それにふさわしい名称が必要がある」<sup>6)</sup>と考え、彼らはこれに「クリオメトリックス」(Cliometrics)というよび名をつけていた。

この新造語の発案者がスタンリ・ライターであることは、パーデュー大学での当時の同僚たちが証言しているところである<sup>7)</sup>。彼らはパーデューで、彼らのいう「飲み仲間たちのまったく内輪の社交的集まり」を「クリオメトリックス・ソサエティー」(Cliometrics Society)と自称していた。この言葉は、ライターのシカゴ大学学生時代の「セオメトリックス・ソサエティー」(Theometrics Society)に端を発している。当時の若い野心的な「メトリッジャン」たちのグループは、計量経済学会(Econometrics Society)に入会を申し込み、それを却下されたので、それを不満として戯語化した集りをつくっていた。ライターた

6) Lance E. Davis, Jonathan R. T. Hughes and Stanley Reiter, "Aspects of Quantitative Research in Economic History," *Journal of Economic History*, Vol. XX (December, 1960), p. 540; reprinted in A. W. Coats and Ross M. Robertson, eds., *Essays in American Economic History*, New York, Barnes and Noble, 1969, p. 2.

7) J. R. T. Hughes, "A Note in Defense of Clio," *Explorations in Entrepreneurial History*, Second Series, Vol. II, No. 2 (Winter, 1965), p. 154.

ちがパーデュー・セミナーに招かれデータ処理に関する彼らの研究を報告したさいに、この新語が紹介されたのである。

この新語は、おそらく「歴史の女神クリオ (Clio) と現代の神、計量 (Measurement) との結婚を表明する」という意味であったであろう。だが、「より伝統的傾向をもつ歴史家たちは、すぐさま、この関係が結婚ほど喜ばしいものでもなく、自由意志によるものでもないことを示唆した。」<sup>8)</sup> 伝統的経済史家は、この新語を歴史に対する僭称と感じ、はげしく反撥したが、ニュー・エコノミック・ヒストリーの生成過程における新旧両世代の経済史家の対立を、いみじくも伝えている。クリオと現代神の結婚がよろこばしくないという点で、ハーリー・シャイパー (Harry N. Scheiber) は、「クリオメトリッシャン」 (Cliometrician) をもじって「クリオマジシャン」 (Cliomagician) とすべきだとした<sup>9)</sup>。また、マイヤー・バースタイン (M. L. Burstein) は、「『陰うつな学問』は『歴史の女神』をひきくだいて、一つかみの粉にする。経済史家、なかでもクリオメトリッシャンと自称する一部俗物どもは、この粉を粘土にし、経済の箱におしこみ、経済理論の構造とやらのいうところの数学記号にそっくりにしたてる。スペイン帝国の抬頭する騎士団を取りかこむものは、物価統計と国勢調査報告。アラビアの香料、中国の絹を計るものは通関統計。おお、おお、ひどいことよ」<sup>10)</sup>と痛烈に皮肉った。これに対して、パーデュー・グループも、クリオメトリックスという言葉はもともと形式ばらない仲間うちで使われたのが広まったものであって、「これまで芽ばえてきた努力を記述するより良い、短い言葉があるなら、われわれはそれを検討しよう。しかし、クリオに対するわれわれの意図は、これまでも、いまでも、恥かしくないものであり、俗悪という刻印をおされるようなものではない」<sup>11)</sup>と反論した。

8) Peter D. McClelland, *Causal Explanation and Model Building in History, Economics, and the New Economic History*, Ithaca, Cornell University Press, 1975, p. 176.

9) Harry N. Scheiber, "On the New Economic History—And Its Limitations: A Review Essay," *Agricultural History*, Vol. XLI (October, 1967), p. 383.

10) M. L. Burstein, "Homer on the History of Interest Rates," *Explorations in Entrepreneurial History, Second Series*, Vol. II, No. 1 (Fall, 1964), p. 56.

1963年ころになると、アメリカ経済史の数量的研究への関心が急激に高まり、それを反映して研究の数もふえた。ダグラス・ノース (Douglas C. North) は、当時の事情を「アメリカの経済史に一つの革命が起りつつある。それは、アメリカ経済史の伝統的解釈に懐疑的であり、かつ新しい経済史 (new economic history) は確実な統計資料にしっかりした根拠をおいていなければならないと確信する、新しい世代の経済史家によって口火を切られた」<sup>12)</sup>と述べている。「ニュー・エコノミック・ヒストリー」(New Economic History)は個有名詞として用いられるようになり、1963年のアメリカ経済学会年次大会の「アメリカ経済史の再検討」と題する分科会で、ロバート・フォーゲル (Robert W. Fogel) は「『ニュー・エコノミック・ヒストリー』の暫定的見解」を包括的に示した<sup>13)</sup>。クリオメトリックスほど挑発的でない、この温健な表現「ニュー・エコノミック・ヒストリー」の著作権は、ジョナサン・ヒューズに帰属するとされている。ジョージ・マーフィー (George G. S. Murphy) は、この言葉が最初に使われたのはデイヴィス、ヒューズ、マクドゥーガルの『アメリカ経済史』 (*American Economic History*, Homewood, Ill., Richard D. Irwin, 1961) の序文の中であるとしているが<sup>14)</sup>、デイヴィス自身は、「『ニュー・エコノミック・ヒストリー』という術語はわたしのかつての同僚 J. R. T. ヒューズによって造り出された」と明記している<sup>15)</sup>。さらに語をついで、「イギリスの典型的な女流探偵小説作家の言葉に『彼がいま知っていることを、その当時知っていたなら』というのが

11) J. R. T. Hughes, *ibid.*, p. 154.

12) Douglas North, "Quantitative Research in American Economic History," *American Economic Review*, Vol. LIII (March, 1963), p. 128; reprinted in Ralph L. Andreano, ed., *New Views on American Economic Development*, Cambridge, Mass., Schenkman, 1965, p. 10.

13) Robert W. Fogel, "A Provisional View of 'New Economic History'," *American Economic Review*, Vol. LIV (May, 1964), pp. 377-389.

14) George G. S. Murphy, "The 'New' History," *Explorations in Entrepreneurial History, Second Series*, Vol. II, No. 2 (Winter, 1965), p. 145.

15) Lance E. Davis, "'And It Will Never Be Literature': The New Economic History: A Critique," *Explorations in Entrepreneurial History, Second Series*, Vol. VI, No. 1 (Fall, 1968), p. 75.

あるが、彼が知っていなかったことはたしかだと思う。(経済史を含めて)あらゆる学問が進歩するのは、実質的研究がなされることによってのみであり、『新しい』歴史についての論争は、たしかに資源をこの目的からそらしてしまった』とのべた。1964年にはアメリカ経済史に革命的衝撃を与えたロバート・フォーゲルの『鉄道とアメリカの経済成長』が、また1965年には、アルバート・フィッシュロウ (Albert Fishlow) の『アメリカの鉄道と南北戦争前の経済の変遷』が出版され、新しい数量的分析は飛躍的に発展した<sup>16)</sup>。同時に一方で、方法論争も盛んに行なわれた。その論争の中で、ニュー・エコノミック・ヒストリーという名称が、新しい研究方法を伝える包括的な概念として定着していった。ラルフ・アンドレアノ (Ralph L. Andreano) は雑誌『企業史研究』(*Explorations in Entrepreneurial History*) に発表されたニュー・エコノミック・ヒストリーの方法論に関する論文を後に集めて編纂し、この編著に『ニュー・エコノミック・ヒストリー——方法論に関する最近の諸論文』(*The New Economic History: Recent Papers on Methodology*) という表題をつけている<sup>17)</sup>。

計量経済史 (econometric history) という言葉もまた、比較的早くから使われていた。前に掲げたフォーゲルのアメリカの経済成長に与えた鉄道の影響に関する著書には、『計量経済史論集』という副題がついている。しかし、言葉の厳密な意味での、「歴史の計量経済学的研究」“econometric studies of history” は比較的近年まで待たねばならず、その数もまた多くはない。フォーゲルの研究を論評してマーク・ナーロヴ (Marc Nerlove) は、「この書物を読んだ計量経済学者は、わたしがそうであったように、計量経済学の技法の使用がいかに限られたものであり、これらの道具の実際の使い方がいかに単純な考えによるかにおどろかされるだろう」と書いている<sup>18)</sup>。計量経済史

16) Robert W. Fogel, *Railroads and American Economic Growth: Essays in Econometric History*, Baltimore, Johns Hopkins Press, 1964; Albert Fishlow, *American Railroads and the Transformation of the Ante-Bellum Economy*, Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1965.

17) Ralph L. Andreano ed., *The New Economic History: Recent Papers on Methodology*, New York, John Wiley & Sons, 1970.

といわれるものの多くは、このように計量経済学者の眼から見ると、計量経済学的研究ではないことになる。新しい研究は、歴史問題の設定と解決に「計量経済学」を多く使用するというのではなく、「経済学」を使用し、標準的経済理論の推論を多く適用することにある。しかし、狭い意味での計量経済学的手法を使用する研究は少なくない。ゲヴィン・ライト (Gevin Wright) は、彼の展望的論文<sup>19)</sup>でこれらを中間的段階の計量経済学的研究とよんだ。直接資料の得られない数値を推計するための回帰法・曲線適合法の使用、観測値の度数分布の特徴づけのための曲線適合、特定の相関を正当化するための回帰分析の仮の利用といったものをあげている。しかし、厳密な意味での計量経済史研究は、モデルの行きわたった考察と正式な方法によるその推計の二つの特徴を含んでおらねばならず、その出現は、1965年以降といえよう。そして、計量経済史という名称は、研究をきわめて狭い範囲に限定させてしまうことになる。

一方、数量経済史 (Quantitative Economic History) という言葉が存在する。経済史への数量的方法の適用、あるいは、経済史の数量的分析という表現はこの新しい動向の早い時期から使われた。しかし、この言葉は、新しい研究方法の一面、数量化 (quantification) のみを強調しているようにとられるおそれがある。しかし反面、ニュー・エコノミック・ヒストリーという表現が、アメリカの経済史学会という特種の環境から発生した「新しさ」の特徴をおし出しすぎているとすれば、数量経済史という言葉の方がより汎世界的な使用にたえるかもしれない。フィッシュロー＝フォーゲルの展望論文は「数量経済史—その中間的評価、過去の趨勢と現在の動向」と名づけられている。わが国の理論・

---

18) Marc Nerlove, "Railroads and American Growth," *Journal of Economic History*, Vol. XXVI (March, 1966), p. 107.

19) Gavin Wright, "Studies in Econometric History," Michael D. Intriligator, ed., *Frontiers of Quantitative Economics*, Amsterdam, North-Holland Publishing Co., 1972.

20) Albert Fishlow and Robert W. Fogel, "Quantitative Economic History: An Interim Evaluation, Past Trends and Present Tendencies," *Journal of Economic History*, Vol. XXXI (March, 1971), pp. 15-42.

計量経済学会もまた、その分科会に数量経済史の名称を採用している。研究内容の変化によってラベルもまた変っていくであろう。ただ、現在の段階では、ニュー・エコノミック・ヒストリーという表現がアメリカでは、一番広い流通性をもっているとはいえる。

## II 経済史研究におけるニューとオールド

それではニュー・エコノミック・ヒストリーにおいて、なにが「新しい」のであろうか。ニュー・エコノミック・ヒストリーの研究に批判的な学者の多くは、「数字」(numbers) が新しいだけにすぎないと揚言してきた。数量化が新しい経済史の品質認証刻印だという考え方が、たしかに初期のクリオメトリックの表現の中にみられ、彼らは、関連する経済諸量の数量化が、伝統的、文学的経済史と新しい接近方法との根本的相違であるという印象を与えていた<sup>21)</sup>。

しかし、数量化が新しい経済史の特徴であるなら、新しい経済史の新しさは数字のみだということにもなる。新しい経済史と古い経済史の相違は、数量化の程度にすぎない。なぜなら、伝統的経済史もまた数量性の性格をおびていたのであり、J. H. クラップハム (J. H. Clapham)、ガイ・カレンダー (Guy S. Callender)、アーサー・コール (Arthur H. Cole) その他の経済史の先駆者たちは、いずれも数量的情報を利用している。アメリカにおいても、19世紀の統計学者、アダム・セイバート (Adam Seybert)、エズラ・シーマン (Ezra Seaman)、ジョージ・タッカー (George Tucker) などの名をあげることができる。

新しい経済史の特徴は数量化、単なる計測ではなく、利用可能な状態にない資料を再構成して、これまでに行なわれなかった計測をなしうるように数量化の再考察をする新しい方向であり、そのための経済理論、合理的経済行為モデ

21) L. E. Davis, J. R. Hughes and S. Reiter, "Aspects of Quantitative Research in Economic History," *Journal of Economic History*, Vol. XX (December, 1960), pp. 539-547.

ルの陽表的な強調である。「なにか計測されるべきかを決定するために、まず理論が必要である。’直接的に計測できないことを間接的に計測しようとするためには、より明白に理論が必要である。経済制度、要素供給、技術等の特定の変化のもたらす経済成長への貢献度の決定のためにも、理論が必要である。新しい経済史の一番の新しさと重要さは、計測の重視というよりは、むしろ、これまで計測されなかったものを計測するための理論への依存である」ということになる<sup>22)</sup>。

新しい経済史と古い経済史の対立は、それをにやう新しい世代の経済史家と古い世代の経済史家との対立、相剋でもある。それは、さらにさかのぼるならば、経済学一般における新しい世代と古い世代の対立でもあるともいえよう。現在のアメリカの長老経済史家、つまりすでに隠退したか、隠退間近かの経済史家が学問的訓練を受け、ひとり立ちできるようになった1930年代の後半以降は、経済学という学問が、とくにその理論において、劇的な展開をとげた時期であった。ケインズとその追隨者、解説者をそしゃく吸収することに熱狂し、一時期スミス、リカードオ、ミル、マーシャルなどの伝統的研究の導き出した不滅の真理にさえ訣別しようとした。経済学者はケインジアンとノン・ケインジアンに色別けされた。理論こそが肝心であり、この「新しい経済学」を理解しえないものは、経済学者としての地位に不安をさえ感ぜざるをえないほどであった。ケインズ経済学を認めぬハイエクなどはこの風潮の中で、経済学の筆を折って自から経済学界から隠退した。しかし、同時にこの新しい経済学が現実世界の理解につぎつぎと新しい展望を開いたことも確かであった。第二次世界大戦をはさんで、戦後ケインズ革命に対する反革命がおこった。ケインズの解釈と普及にアメリカがもっとも急進的であったように、戦後の新しい傾向にもアメリカがもっとも先駆的であった。新しいスタイルのマイクロ経済学、数理経済学、アクティヴィティー・アナリシス、オペレーションズ リサーチ等々の

22) Robert W. Fogel, "Reunification of Economic History with Economic Theory," *American Economic Review*, Vol. LV (May, 1965), pp. 92-98.

すばらしい発展が、ケインジアンのマクロ経済理論を圧倒した。これらの時期を通じて、ケインズ以前の経済理論家は大部分無視されるか、姿を消していった。

経済理論の激動の中心のすぐ近辺におりながら、古い世代の経済史家は経済学の発展から取り入れるところがほとんどなかった。一つには、アメリカのかなりの大学において、経済史家は経済学部に属するより、歴史学部に所属しており、経済史は、文化史、科学史、宗教史などと同様歴史学の一部門とみなされていたからであろう。1950年代の初めごろまで、経済史の椅子は純粋に歴史を専攻した卒業生によってしめられており、経済学の訓練を受けた経済史家はきわめて少なかった。「1950年に至るまで、学部レベルの講義で使われる主な教科書は、1924年以来ほとんど改訂されないままであった」<sup>23)</sup>とさえいわれている。アメリカを中心とした経済理論の革命的变化は、アメリカ経済史の頭上を通りすぎて行った。しかし、変革の風が経済史の領域にふきこんできたとき、その長い空白の無風状態の継続のために、影響はより急激で、徹底的であった。

1950年代の終りから1960年代のはじめに、経済史の領域に加わった最初の若い世代(いまではもう若くない世代であるが)は、1920年から1930年代の間の生まれで、彼らは歴史のディシプリンではなく、経済学のディシプリンで訓練され、経済史の領域に、いうならば応用経済学の一部門として入ってきたひとびとであった。彼らが訓練をうけた経済学は、古くなった「新しい経済学」と「新しい経済学」以後の「新しい」経済学であった。したがって、ケインズ以前の経済学にも、それとつながる古い世代の経済史家の方法や動機にも、きわめて無縁であり、新しい方法、統計的技法、データ処理法を駆使して新しい情報をつくり出し、古い枠組をはずして古い解釈を改訂し、経済史を書きかえようとした。古い世代の経済史家は、たとえ古くなった経済理論を多少理解していても、経済学の現代的訓練の広範な技術的側面を理解することは困難であった。その結果、ごく普通の経済理論や統計的分析の適用にさえ、古い世代は不

23) J. R. T. Hughes, "Fact and Theory in Economic History," *Explorations in Entrepreneurial History*, Second Series, Vol. III, No. 2 (Winter, 1966), p. 80.

信をいただくことになった。こうした不信と対立は、時間の経過にともなって学会内における新旧世代のバランスが逆転するまで、いく分感情的といえるほどに、続いたのである。

### III ニュー・エコノミック・ヒストリーの特徴

ニュー・エコノミック・ヒストリーの品質認証刻印は、それが計測を重視すること、計測と理論との密接な関係を認めること、および数学を利用することだといわれる。

過去においても計測は行なわれたし、数量化はなされてきた。しかし、それは原型のままのデータの蒐集とその提示、あるいは原データの比較的単純な再分類に限られていた。物価指数の作成についてのおおがかりな研究という例外はあるが、これまでには、一次データを、厳密に定義された経済学概念に合致するように組織し、再構成するということはほとんどなかった。ニュー・エコノミック・ヒストリーの最初の関心の一つは、そうした一次データに関する作業からはじまった。バーデュー大学を中心とする自称クリオメトリシャンたちは、これまでに行なわれてきたのとは実質的に大きく違った方向に計測をおし進めたという点で、たしかに先馳的貢献をはたした。

新しい数量的研究は三つの範疇に分けられる。第一は、残存する資料、データの断片から経済制度、経済過程の拡がりを再構成することであり、そのために経済理論、合理的経済行為の数学的モデルが用いられる。この点でニュー・エコノミック・ヒストリーは、発掘された骨の破片から、生物学の理論にもとづいて、先史動物を再現しようとする古生物学者に似ているといわれる。第二に、一次資料は、厳密に定義された経済学概念に合致するように再構成される。国民所得統計は、その著明な一例である。国民総生産は、国勢調査表や、原単位の事業体に残されている記録などから蒐集した資料から、集計概念とし

て合成されたものである。第三に、間接的にしか計測しえないものの推計がある。鉄道の社会的節約を測るのに、鉄道より遅い輸送手段によって運ばれるさいの時間のロスの費用の推計を用いたのは、その一例である。ロバート・フォーゲルは、在庫を、ある商品を産地から仕向先に輸送するのに要する時間のギャップをうめるのに必要なものと考え、低速輸送手段による輸送時間の増大、つまり、費用の増加を余分の在庫を維持する費用として推計した。

ニュー・エコノミック・ヒストリーの第二の、きわだった特徴は、計測と理論の結びつを重視し、理論の利用を陽表的にはっきりと明言することである。計測の新しい問題に直面して、彼らは統計学、応用数学の領域での進歩、数理経済学、計量経済学の分野の発展の成果を利用してきた。とくに間接的推計をするにさいして、推計したいものと実際に計測することのできるものとの間の関数関係を明らかにする理論を彼らは必要としたのである。さらに、単なる計測のためだけではなく、特定の政策、制度、経済過程の純便益を評価する場合にも、なんらかの理論が必要である。鉄道の便益は、実際観察された国民所得と鉄道がない場合に達成されたであろう国民所得の差によって測られた。しかし、鉄道のない場合の経済は観察することができないから、その経済の特徴を関数関係で表わし、鉄道のない場合の関連変数の値を予測できるような形でとらえうるような経済モデルを、フォーゲルは必要とした。

ニュー・エコノミック・ヒストリーの第三の特徴は、歴史というこれまで文章によって表現される学問の領域に、数学式を導入利用したことだといわれている。もちろん、過去にも暗黙のうちに、意識外のものとして数学式が用いられてきた。言葉をかえていえば、陰伏的に単純な方程式の形で書き表わされる関数関係が想定されてきている。たとえば、19世紀アメリカ製鉄業の発展を、銑鉄生産の急増によって説明するとき、過去の経済史家もまた製鉄業の総産出量と全体の1/6にすぎぬ銑鉄産出量が比例的であるという単純な方程式を想定しているのだとニュー・エコノミック・ヒストリアンは指摘する。彼らは、そうした方程式を陽表的に示し、それが正しいかどうかを数学的に、より厳密に検

証することをはっきりさせるところに特徴があるといえよう。

ニュー・エコノミック・ヒストリーの最大の特徴は、経済史の数量化ということよりも、むしろ、数量化のための理論の利用、数量的関係の理論的検討といった、歴史と理論との関係の陽表的承認と歴史分析における理論の積極的利用であった。これは、根本的には、歴史事象の生起の一回性、特異性の叙述と歴史事象の分析のための普遍的因果律の存在という問題に関連するものである。

歴史における特異性、非再生性を強調する徹底した経験主義の立場にたてば、単一の歴史記述の間で因果的順序を定義することはできないということになるであろう。しかし、一般には、歴史についてそのときどきの性格についての叙述がなされるだけでなく、経過の類型の関係についても叙述がなされる。歴史学ないし歴史記述は、物語のように、はじめと終わりがあり、そしてその間のつながりが存在する。歴史における状態の経過、順序には、なんらかの因果的意味が存在する。歴史における経過と順序に関心をもつことは、事実の単なる記録にとどまるのではなく、歴史の真の叙述を選びだす方法に光明をうるためである。「実際に起ったこと」を記述するのが歴史家の目標であっても、「なぜそうなったか」、「それからどうなったか」の記述を排除するものではなく、むしろそれは正しい叙述を選択する基準となるのである。

ところで、単一の歴史的出来事を説明し、その原因を見出そうとすると、内在的困難さに直面する。過去の出来事の特異な性格である、もとにもどせない過去性と経験性、非再生性による歴史的出来事の独自性、特定性の強調は、歴史的出来事についての一般化を非常に困難に、あるいは、ほとんど不可能にするようである。一方、「なぜ」、「なぜならば」の説明には、特性状態の(経過的あるいは同時的な)連続性と特性間の永続的關係についての一般化の主張をふくんでいる。そして、歴史における因果關係の説明は、歴史事象の過去性、非再生性、独自性の限界に当面することになる。そして、歴史的説明が規則性を

前提としていても、攪乱要素が因果体系を圧倒するであろうし、しかも攪乱要素は歴史的時間の各瞬間に異なって分布されている。利用可能な一般化における攪乱要素があまりに多く、その分布を知りえないがゆえに、われわれは説明を放棄し、特定事象の事実の記録に専念した方がましであるということにもなる。しかし、マイヤー＝コンラッドは、歴史体系における説明とは、初期条件と因果律ないし一般化が与えられるとき、一つの段階からつぎの段階への移行への確率の推計と解釈することができると考えた。そうすれば、経済史家の任務は、経済的に実現された一連の独立の条件に加えられるべき種々の外生変数の変化を求めることになる。推計学的因果体系は、外生的な原因と内生的結果の二変数と歴史事象の独自性の意味を表わす第三の攪乱項からなっており、歴史の一回性・偶発性と個人の異なった価値を含むものである。この歴史的、推計的因果体系は不完全な因果体系であり、この接近による一般化のためにはより詳細な情報の蒐集ではなく、より慎重な変数の検証と推移の確率の推計が要求されることになる。

#### IV 事実に反する仮定をめぐって

ニュー・エコノミック・ヒストリアンは、歴史における因果的説明は可能であると考え、歴史叙述に積極的に一般的な関連の枠組を形成する理論の適用を強調する。歴史と理論とは二者選一的な対極関係にあるとして理論を拒絶する歴史家もあるが、歴史記述における理論の妥当な地位を肯定する歴史家も少なくない。理論の導入が、数量的であろうとなかろうと、経済史を単なる物語性を脱した厳密な意味での分析的なものにすることについては、古い伝統的経済史家も異論はない。なにが起ったのか、なぜ起ったのかと問うとき、「なぜ」という問いに答えることは、ある種の理論なり哲学にもとづくことであり、どの時代にも素朴な理論、通俗の哲学が漠然と存在する。なすべき選択は、理論を使用するかしないかではなく、専門的理論をとるか素朴な理論をとるか、そし

て、理論をいかに利用するかである。伝統的経済史家にとって、理論は答うべき歴史問題の基礎となる概念の組立てに用いられるべきものであり、さらに理論的構成は経済史の知識の不明部分の解明に役立てられ、また歴史的方法の適用によって発見された事実とこの理論的構成との比較によって問題の解釈が可能になるとみなされてきた。彼らにとって、歴史と理論との関係はそこまでであり、歴史は「理論を使う」ものであった。したがって、理論自体の妥当性にもとづいて歴史的に未知の数量ないし事実（たとえば、鉄道による社会的節約）の発見と新しい解釈が示されることは、理論的構成への過信として許すことができなかった。

この点についての、激しい方法論的論争の中心となったのは、「事実を反する」仮定ないし命題についてのものであった。この「事実を反する」(Counterfactual) 命題という表現も、「もし……であったなら、歴史は……」と思わせる極めて挑撥的な、伝統的経済史家の神経をさかなでするような言葉であった。ロバート・フォーゲルが最初に鉄道「不可欠性の公理」を検討したさいに、鉄道に代る次善の輸送手段によれば農産物の輸送費が50パーセント増加することを推計したが、この仮説の場合に、彼は「他の選択機会の提供」(Supply of Alternative Opportunities) という言葉を使った<sup>24)</sup>。しかし、この推計から「鉄道がなかったなら」アメリカ経済の潜在的生産可能性の減少は国民総生産の3パーセントにすぎなかったといわれたとき、論争の口火が切られた。『『新しい』経済史の方法論の側面のうちで、その実践家たちが、事実を反する counterfactual (あるいは実際とは逆の contra positive ないし仮設的な代りの選択 hypothetical alternative) 命題を明示的に使用すると主張したことほど、大きな火災を(しかし、より乏しい光明を)ひきおこしたものはない。多くの『伝統的』歴史家にとって、事実を反する歴史は、歴史に反するもの anti-history ないし歴史に非ざるもの non-history であった。しかし、これらの同じ歴史家たちが、絶えず暗黙のうちに事実を反する論議を用いているのである。新旧の相

24) Robert W. Fogel, *Railroads and American Economic Growth*, pp. 10-16.

違は、専断に反する議論を發明したことにあるのではなく、実際に反する議論を明示的に使用することである」<sup>25)</sup>ということになる。

伝統的経済史家にとって、「もし鉄道がなかったなら、19世紀のアメリカ経済の成長はどうなっていたか」を推計することは、歴史的に間違っている仮定の上にならば歴史的目的のために数学的・統計的な一連の操作をすることであり、もしならぬか実際に起こらなかったことが起こっていたならどうなったかを叙述することであり、それは歴史研究でなく架空の物語である。「ナポレオンがウォーターローで勝っておれば」とか、「ヘンリー4世がドイツ侵攻準備中に殺されていなかったなら」どうなっていたかを問うことは歴史家にとって許されないことである。歴史研究の取り扱うのは「存在した過去」(past that was)であって、「存在したかもしれない過去」(past that might have been)ではない。「実際におこらなかったことを、正確に数量的に小数点以下2桁まで、どうして知ることができるのか」不思議だということになる。事実を反する仮説に立った研究の結果は全然歴史などではなく、架空の歴史(as if history)、疑似歴史(quasi-history)、虚構の歴史(fictitious history)ということになる<sup>26)</sup>。

しかし歴史家は、新旧を問わず、みずからを純粹の記述の中にかぎるひとは稀れである。歴史家の貢献は出来事の経過を理解し、因果関係を分析解釈する能力の中にある。歴史研究が窮極的に実証的研究の範囲にとどまるかぎり、因果関係の解釈のためには、なんらかの仮定をかかすことはできない。人間事象についての因果関係は実証することのできない仮定だからである。したがって、歴史においてなぜという設問に答えるとき、そこには潜在的、陰伏的な仮定が含まれていることになる。さらに歴史家は、歴史的出来事、歴史的人物の行動についての評価と批判の権利を放棄するものではない。歴史の中から「ウッドロ

25) Lance E. Davis, "‘And It Will Never Be Literature’: The New Economic History: A Critique." *Explorations in Entrepreneurial History*, Second Series, Vol. VI, No. 1 (Fall, 1968), p. 75.

26) Fritz Redlich, "Potentialities and Pitfalls in Economic History," *Explorations in Entrepreneurial History*, Second Series, Vol. VI, No. 1 (Fall, 1968), p. 91.

ー・ウイルソンは、すぐれたある共和党政政治家をパリ平和会議のアメリカ代表に任命しなかったことの結果を誤算していた」とか、「アンドルー・ジョンソンはグラントを陸軍長官に起用することによって、彼の政敵を利する行動をした」と批判するとき、彼ら歴史的人物が実際にとった行動と彼らがとりえたであろうよりすぐれた行動とを対比しているのであり、観察された政策と他の採用されたであろう政策との優劣を比較しているのであり、評価・批判は実際に起こっていない状態の中での出来事について、事実と反する叙述を行なっていることになる。起こったかもしれない事柄についての叙述は、実際に観察された歴史的状況と関連性がないという点では、仮定の世界の中での経済変数、経済制度、経済行為の因果関係の叙述説明ではある。しかし、このような叙述の基盤には、現実に存在した世界に関するこれらのことについての普遍的知識が存在するのであり、仮定の事柄と観察された事柄との間になんらかの関連が必要である。こうした事実と反する叙述、起こったかもしれない事柄についての判断を歴史から排除することはできず、それはまた、伝統的経済史の中にこれまでも暗黙のうち存在しつづけてきた。ただ、それを表だって明らかに揚言して主張するかどうかの違いであった。ロバート・フォーゲルはユーゲン・ジェノヴィーシー (Eugene D. Genovese) の「南部経済発展にとっての奴隷制農園の意義」という論文を例にとって、ジェノヴィーシーは起こったかもしれない事柄より、むしろ起こった事柄に論拠をおいているように見えるが、彼の議論は一連の事実と反する叙述と理論的仮定に全面的に依存している<sup>27)</sup>ことを例証してみせた。

したがって、歴史が起こったかもしれない事柄についての判断を排除しないなら、問題は事実と反する叙述をなすべきかどうかではなく、そうした叙述の妥当性をきめることを可能にする基準をどう確立するかということになる。ニュー・エコノミック・ヒストリーの研究の多くは、隠されひそかに持ち込まれていた事実のないモデルを明示して、その実証的妥当性を検証することに専念して

27) Robert W. Fogel, "The Specification Problem in Economic History," *Journal of Economic History*, Vol. XXVII (September, 1967), p. 286.

きた。制度、政策、技術革新等が経済活動に及ぼす純効果を取り扱うさいに、事実に反する仮定をさけることはできない。それらのもたらす純便益を決定するためには、それが存在しない場合、経済がどう発展するかについての実証的に正しい叙述が必要になる。ところで、事実に反する叙述の妥当性を検証することは不可能だという批判が、伝統的経済史家からなされている。しかし、事実に反する叙述の妥当性の決定と経済行動の関数関係についてのその他の叙述の正当性の間には、なんらの方法論的相違はないというのがニュー・エコノミック・ヒストリアンの主張である。すべての経済学、経済史の基本的前提は、経済行動には規則性があり、この関係を表わす関数を定義することができるということである。この規則性が承認されるなら、経済生活を示す関数関係の妥当性の識別過程と事実に反する叙述の妥当性の検証過程とはまったく同じことになる。経済行動の関数関係を示す方程式の実証的妥当性がひとたび検証されるなら、特定の従属変数の事実と反対の値がでて、この式に事実と反対の値を代入するだけで、独立変数の値がどれくらいであるかをきめることができるのである。「事実に反する叙述に関して、経済生活の行動関係の検証技術・方法がこれまでにいくわきなかったような新しい問題はなにもないのである」ということになる。

ただ、歴史研究における行動方程式の検証にあたっては、実験室の中のような無限の観察をうることはできず、歴史が残してくれた一連の観察の中にはめこまれざるをえない。そこで、方程式の妥当性を検証する方法を発見することが大切になる。検証の数の多いほど信頼度は高いが、それは無限の検証を必要とするのではなく、観察が非常に少ない場合でも、一回以上の歴史的データから導き出した方程式を検証することは可能である。

伝統的経済史家は、一步ゆずってある種の問題についての、事実に反する叙述を承認するとしても、経済史、社会史の叙述に社会科学の理論が利用しうる領域と利用しえない領域が存在すると考える。事実に反する命題に適し、それが効果的な場合とそれを制限する場合が考えられる。たとえば、「クレオパトラ

の鼻がもう少し低かったなら、どうなっていたであろうか」というような問題がある。この点、ニュー・エコノミック・ヒストリアンも事実と反する命題のうちでも、ある種の命題は他のものより解決がはるかに困難であることは認める。アメリカの水陸輸送サービスの長期費用曲線の傾斜をきめることはできても、現在のところ王妃の鼻の高さが政治家の意志決定過程に及ぼす影響の仕方をわれわれは知らないからである。しかし、それにもかかわらず、彼らは窮極的にはそれが可能であると信じている。彼らは歴史の長い過程に適用されるモデルを原則的には定義しようと信じている。そして、そうしたモデルは本質的に時間を含んでいるであろう。大部分のパラメーターの値は時間の関数であろうからである。ただ、これまでにそうしたモデルを展開した学者はないし、それが可能かどうかはわからないし、たとえ可能であっても、それが有益かどうかはわからないだけだというのが彼らの立場である。

## V ニュー・エコノミック・ヒストリー発展の諸方向

ニュー・エコノミック・ヒストリーの発展の方向は、ある意味で戦後のアメリカの経済理論の発展の方向と平行している。伝統的経済学においてリカードイアンの経済理論がオーソドックスの地位を占めるかぎり、経済は窮極的には均衡するものであって、変動・発展の問題の入りこむ余地はなかった。経済理論は変化や進歩の現象と相容れず、せいぜい静学的均衡の比較が分析の有力な道具にすぎなかった。ケインズ流のマクロ経済理論の出現に刺戟され、1940年代に入ってロイ・ハロッドが静態に動きを与える過程の分析に手をそめて以来、経済成長の分析への関心が急速に高まり、第二次世界大戦後成長理論は経済理論の中でももっともファッショナブルな分野として脚光をあびた。数多くの成長モデルが提示され、経済成長への志向は実証的研究のみならず、政策決定や経済行為の規範にも影響を与えた。経済理論の発展が比較のおくれてもちこまれたアメリカの経済史の領域においても、この潮流に影響されるところが大きい。

かった。元来、経済史家は過去数十年の間発展の研究推進の中心的地位にあったこととあいまって、経済成長、経済発展の過程における戦略的要因の分析は、ニュー・エコノミック・ヒストリーの発展方向のメイン・ストリームの一つになったといえよう。

ニュー・エコノミック・ヒストリーの研究において関心の集中し、成果のあげられてきた分野をロバート・フォーゲルは9つに分類している。

第一の分野は、経済成長の類型と成長をもたらした便益の配分の説明である。このため、統計シリーズの拡張、なかんづく国民所得勘定の拡張がなされた。経済発展の数量的分析に決定的に重要な貢献をしたのは、サイモン・クズネツによって作成された、1869年以来の国民所得勘定の時系列であった。この統計シリーズはさらに過去にさかのぼって拡張され、ロバート・ゴールマン（Robert E. Gallman）によって1834年まで推計されている。一方、この統計シリーズは細分化の方向に拡張され、国民所得の各種構成要素の細分化された時系列が整備された。いま一つの方法としては、リチャード・イースタリン（Richard A. Easterlin）などによって、発生した所得の地域別構成に細分化する方向に拡張され、経済発展における地域の相対的重要性の分析の手がかりを得るようになった。国民所得関連統計シリーズも、つぎつぎに拡張整備されつつある。

第二の分野は、産業発展の説明である。アメリカ経済発展の過程における1830年代以降の近代製造業の成長過程の説明は、これまでも経済史の中心的課題であった。ニュー・エコノミック・ヒストリーは、19世紀の製鉄業、綿織物業、農業などにおいて、伝統的分析が新しい機械の発明とその拡散普及という事実のみ重点をおきすぎていた一面性を正して、原材料価格、賃金、所得、代替財・競争財価格等々需要曲線と供給曲線の位置を決定し、そのシフトをもたらす諸要因をとり入れたモデルを開発して、これらの産業の発展に及ぼす各種要因の諸効果の計測を可能にした。鉄道のアメリカ経済成長に及ぼした影響の研究などもこの領域に含めてさしつかえないであろう。

第三の分野は、技術変化あるいは総生産要素の生産性の計測である。技術進歩は産出量の増大に貢献する大きな要素の一つとして興味ある研究対象となってきたが、とくに、産業内の、あるいは経済全体についての技術進歩を計測しようとする方向での研究が数をましつある。こうした方向での研究には、新しい技術を表わす生産関数の推計、新しい技術と古い技術の相違の推計、さらに、技術の効率の成長率の計測、技術を革新する機会と産業の成長率との関係の分析などがある。

第四の分野は、新しい技術の普及拡散の説明である。新発明、新技術が一企業から他の企業へ、一産業から他の産業へ広がっていく早さの決定要因を具体的に明らかにする研究である。交配種とうもろこしの州から州への普及の様相を利益の多寡によって説明したツヴィ・グリリカス (Zvi Griliches) の研究や、自動刈取機の普及率を分析したポール・デイヴィッド (Paul A. David) の研究、鉄鉱石の製錬におけるれきせい炭工程の普及の研究、製造業における蒸気エンジンの普及についてのピーター・テミン (Peter Temin) の研究、などがこの分野のものである。

第五の分野は、人的資本への投資の研究である。比較的近年に至るまで、教育や健康に対する支出は、消費支出の一部として取り扱われ、生産過程に影響を及ぼすものとみなされていなかった。しかし、経済成長についての具体的研究がすすむにつれ、賃金労働者の子弟の教育や健康のための支出は、農民や自営業主の土地や設備の維持、拡張のための投資支出と同じ性質のものと考えられるようになった。経済発展に寄与する諸要因の貢献度の具体的計測がすすむにつれて、物的資本への投資と同様、あるいはそれ以上に人的資本への投資の意義が認識され、この問題に関する研究が急速に公けにされるようになった。19世紀アメリカにおける人間への投資を通じて社会の資本が追加されていく方法についてのシオドア・シュルツ (Theodore W. Schultz) やアルバート・フィッシュローの研究などがそれである。こうした研究は、教育投資量を決定する諸要因の研究、教育投資の収益率の計測への方向と、健康投資の決定要因と収益性の

研究への方向、資本形成の一形態としての人的移動の効果に関する研究の方向へと向っている。

第六の分野は、金融市場の研究である。経済成長のための物的・人的資本への投資をまかなう資金を提供する金融市場の発達、地域間・産業間の資金の円滑な流れに対する障壁とその原因となる地域間の利子率の格差の研究などである。19世紀西部での高利子率を、東部の銀行にとって西部の狭小市場での融資のためのコスト高、遠隔の貸付先の信用調査の困難さなどに基因させたランス・デイヴィスの研究や、19世紀大草原諸州農民の金融が地元住民によってまかなわれていたことを指摘したアラン・ボグ（Allan G. Bogue）の貨幣市場の研究などはこの分野のものである。

第七の分野は、奴隷制の経済学である。人的資本形成の制度的に特殊な形態である奴隷制の問題は、アメリカ史上重大な領域であるわりに、これまで政治学的に論ぜられることはあっても、純粋に経済学的分析をされることが少なかった。コンラッド＝マイヤーがニュー・エコノミック・ヒストリーの新しい方法論の実験のサンプル・ケースにえらんで以来、奴隷制の経済学は、ニュー・エコノミック・ヒストリアンのお気に入りの研究領域となった。南北戦争前の奴隷制経済は収益率が低く、南部経済は崩壊寸前にあったという伝統的定説をくつがえし、南部奴隷制農業は収益性も高く、経済的には存続可能性が高かったこと、南部を疲弊させたのは南北戦争の敗戦によることを示す研究などがつぎつぎに世に問われた。最近のフォーゲル＝エンゲーマンの近著『タイム・オン・ザ・クロス』（*Time on the Cross*）<sup>28)</sup>にいたるまで、経済史家のみならず、素人評論家、一般読者をまきこんで論争の最も熾烈な分野である。

第八の分野は、人口移動の研究である。経済発展の過程における人口の国際間移民、国内間移動、人口の都市移動、西漸運動の研究および、経済の工業化と平行する都市化の諸問題の研究である。アメリカ経済に対するヨーロッパ移民の

28) Robert W. Fogel and Stanley L. Engerman, *Time on The Cross: The Economics of American Negro Slavery*, Boston, Little Brown and Company, 1974.

影響、労働力の成長に対する移民の貢献に関するイースタリンやクズネツツの研究、人口の西部への移動に果たした鉄道の役割についてのフィッシュローやフォーゲルの研究、南北戦争前の東北部の都市化傾向についてのジェフリー・ウィリアムソン (Jeffrey G. Williamson) の研究はこの分野のものである。

第九は、政府の財政政策、貨幣政策の効果の歴史的研究である。政府の政策にもとづく経済諸変数の変化は非常に広汎な政治的、社会的波及作用をひきおこすものであり、歴史研究の論争点の中心になるのは当然である。アンドルー・ジャクソンの第二合衆国銀行に対する攻撃が1830年代のインフレとデフレをひきおこしたとする通説に対して、インフレの原因はメキシコや英仏よりの金貨の流入による正貨ストックの増大にあることを実証したヒュー・ロコフ (Hugh Lockoff) の研究や、南北戦争中にとられた貨幣政策の所得分配と戦後のデフレに及ぼした効果についての研究や1930年代の大不況からの回復における財政政策の役割の研究などはこの分野に属するものである。

ニュー・エコノミック・ヒストリーの研究の展開が主として経済発展の問題をめぐるものであったことは、当初の研究を特定の歴史的期間と特定の地理的拡がり限定することになったのは、やむをえないことではあった。アメリカで工業化がはじまり、近代国家になっていく時期、1830年以降の産業発展の経過、あるいは南北戦争前の北部経済と南部経済の対比などが研究の対象となり時代的には、19世紀前半、とくに1830年代以降の期間、第二次世界大戦以前、1930年代までに限られた。また、成長、効率の問題に比べて、分配、公平の問題が看過されてきた。適用される理論も狭い範囲のものに限られ、多部門一般均衡モデルの利用にまでは至らなかったし、経済的・政治的・社会的変数間の相互関係をふくむ一般モデルによる学際的研究にもほど遠かった。

生成後数十年をへたニュー・エコノミック・ヒストリーの新しい努力は、この時間と空間の制限を拡張する方向に向けられている。アメリカ大陸への移民の問題からさらに、大西洋の海運業における新技術の普及、アメリカ関税のイギリス鉄鋼輸出への影響、イギリス資本市場の硬直性と偏向性など、アメリカ

経済史と深いかかわりをもったイギリス経済史へのニュー・エコノミック・ヒストリーの適用, さらには, ヨーロッパ大陸諸国の経済史への適用が, 祖先をヨーロッパにもつアメリカ経済史家の手によって行なわれるようになった。

時代的には19世紀からさらにさかのぼって, 18世紀あるいはさらにそれ以前の時代への研究の拡張がなされている。19世紀以前になると数量的研究のための資料の欠除がこえがたい障害になるが, 残存する18世紀の遺言検証記録や17世紀の租税記録から, さらには数世紀にさかのぼりうる教会の記録の断片から, 人口, 農業生産, 富の分配などのデータを再構成する努力が行なわれている。

分配の問題が近年までニュー・エコノミック・ヒストリーの主要な研究領域から外れていたのは, 関心の欠除というより, 問題の内在的困難さにもよるものであった。19世紀における農業総生産の推計は各種商品のセンサス・データから可能であるが, センサスは労働者数, 農業資本の情報を提供していないので, 労働と資本の分配率を決定することは容易ではなかった。しかし, この困難を克服して, 19世紀中葉の都市の断片的サンプルから都市における富の分配の推計が, 遺言検証記録や租税記録から独立戦争直前の富の分配とその変化の研究が, 郡の抵当証書の記録から土地投機による利益を算定し, 土地政策の所得分配, 富の分配に対する影響の研究などが行なわれている。

多部門一般均衡モデルの経済史への適用はそれほど活潑ではないが, 南北戦争前関税が階層間・地域間の所得と富の分配に及ぼした影響を三部門モデルを用いて分析した研究や, 二部門モデルにより西部における土地解放が, 東部製業造の利潤に及ぼした影響を分析した研究が行なわれている。

経済要因と社会的過程を関連づける方向としては, 国際間移民, 地域間人口移動の経済成長への影響の研究や, 移民, 国内移動における1人当たり所得, 距離, 情報量の相違の効果の研究といった人口統計学的研究が盛んになりつつある。経済的, 政治的, 社会的要素間の相互作用の研究としては, 土地供給と労働供給の制約と農奴制の発生との関係の研究, 制度的改革, 所有権の変化と経済成長の関係の研究, 国民総生産の変化, 農業生産から工業生産へのシフトが

選挙結果に及ぼす貢献度を測定する研究などがある。こうした分野での研究は、他の計量政治学、計量社会学、計量行動科学などとの協力のもとにさらにその範囲を拡大していくものと思われる。

### お わ り に

1950年代の終り、ニュー・エコノミック・ヒストリーが誕生したばかりのときに、はじめてアメリカ経済史学会に出席した、若いロバート・フォーゲルは、年輩の出席者が「経済史のルネッサンス」だというのを聞いておどろいた<sup>29)</sup>。それから十数年、文芸復興が開花するには長い年月ではない。しかしこの間に、ニュー・エコノミック・ヒストリーは、アメリカ経済史の研究における単なる目新しさから一転して、支配的形態になりつつある。現在アメリカの学術雑誌に発表される経済史の論文は、基本的な性格において圧倒的にニュー・エコノミック・ヒストリー的である。アメリカで経済史の Ph. D. の大部分を生産している主要大学の大学院では、申し合わせたようにニュー・エコノミック・ヒストリーの訓練をしている。経済史学会の風土も一変し、古い世代の隠退とともに世代間の断層は消滅した。かつてのニュー・エコノミック・ヒストリーの十字軍の若き旗手であったフォーゲルが、アメリカ経済史学会の会長に選ばれようとしているのも時勢である。ニュー・エコノミック・ヒストリーは、もうけっして新しい研究方法ではなくなった。しかし、いまなお、ニュー・エコノミック・ヒストリーの研究による新しいファインディングスの一片一片は、それが正しいか正しくないかはともかくとして、なんらかの形の論争をひきおこしている。フォーゲル=エンガーマンの『タイム・オン・ザ・クロス』はその一例ではある。

29) Robert W. Fogel, "Historiography and Retrospective Econometrics," *History and Theory*, Vol. IX, No. 3, 1970, p. 246.

シカゴ大学の経済史ワークショップがニュー・エコノミック・ヒストリーの一つの拠点として、活潑な活動をしていた時期に、ニュー・エコノミック・ヒストリアンの研究を身近に見守ってきたジョージ・スティグラー (George J. Stigler) が、こう言ったことがある。「ニュー・エコノミック・ヒストリーに個有の研究技法が存在するのではない。それは考え方の問題である。研究者の数だけニュー・エコノミック・ヒストリーは存在しうる」と、時代の経過とともに、研究の内容、用いられる手法は変るであろう。経済史の新しい方向は、より高度な経済理論と統計学、応用数学の専門的技術を要求する方向に動いている。しかし、それとともに、それにもまして新しい経済史家に要求されているのは卓越した歴史的洞察である。深い洞察に裏づけられた歴史的創造力のみが、ニュー・エコノミック・ヒストリーをいつまでも新しくさせつづけるであろう。